

大中華文庫

漢日對照



大中華文庫

漢日對照

紅樓夢

紅樓夢

III

大中华文库

汉日对照

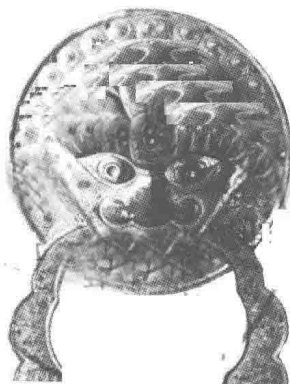
大中華文庫

漢日対照

红楼梦

紅樓夢

Ⅲ



曹雪芹 高鹗 著

伊藤漱平 译

曹雪芹 高鹗 著

伊藤漱平 訳

人民文学出版社

人民文学出版社

大中华文库

汉日对照

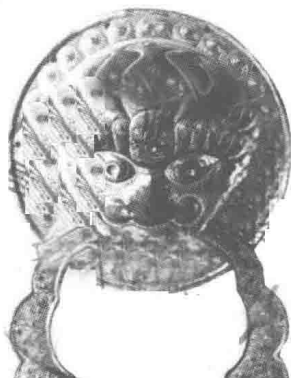
大中華文庫

漢日对照

红楼梦

紅樓夢

III



曹雪芹 高鹗 著
伊藤漱平 译

曹雪芹 高鹗 著
伊藤漱平 訳

人民文学出版社
人民文学出版社

第三十四回

情中情因情感妹妹 错里错以错劝哥哥

大中华文库



1272

话说袭人见贾母王夫人等去后，便走来宝玉身边坐下，含泪问他怎么就打到这步田地。宝玉叹气说道：“不过为那些事，问他做什么。只是下半截疼的很，你瞧瞧，打坏了那里？”袭人听说，便轻轻的伸手进去，将中衣褪下。宝玉略动一动，便咬着牙叫“嗟哟”。袭人连忙停住手。如此三四次，才褪了下来，袭人看时，只见腿上半段青紫，都有四指阔的僵痕高了起来。袭人咬着牙说道：“我的娘！怎么下这般的狠手！你但凡听我一句话，也不得到这步地位。幸而没动筋骨，倘或打出个残疾来，可叫人怎么样呢。”正说着，只听丫鬟们说：“宝姑娘来了。”袭人听见，知道穿不及中衣，便拿了一床衾纱被替宝玉盖了。只见宝钗手里托着一丸药走进来，向袭人说道：“晚上把这药用酒研开，替他敷上，把那淤血的热毒



第三十四回

情中の情 情にたよりて妹を動かすこと
錯裡の錯 錯をとらえて兄を諫めること

さて、襲人は後室や奥方らが引きとったあと、さっそく宝玉のそばにやってきて腰をおろすなり、涙声で宝玉に向かってたずねました。

「どういうわけでこれほど打たれるような目におあいになりました？」

宝玉は吐息をついて、

「あれやこれやとるに足らぬことが原因なのだ。そんなことを聞いてなんになる？ だけど、下半身がばかに痛む、ちょっと見てよ、打たれてどこか傷でもできたのかな？」

襲人はそれと聞いて、そろっと手をなかへさしのべ、中衣をさげようとした。ところが宝玉はほんのちょっと動かただけで、齒をくいしばり、「いたっ！」と叫ぶのです。襲人がはっと手を止めます。こんなことを三、四回も繰り返して、どうにか中衣はさげることができました。襲人があらためて見ますと、股の上半分は青紫色を呈し、指四本もの幅に傷のあとがみみずばれになっているではありませんか。襲人は齒がみして、

「まあ、なんということに！ なぜこんなひどい目に！ 若様がわたくしの申すことをひとことでも聞き入れてくださっていたら、こんなことにはならず済みましたでしょうに。筋や骨には別状ないようですから不幸中のさいわい、ひょっと生まれもつかぬ不具の身におなりでしたら、わたくしたち、いったいどうしたらよいとおっしゃいますの！」

そう怨み言を並べたてているところへ、侍女たちの声がして、

「宝釵さまがお越しになりました」

と取り次ぎます。それを聞いた襲人は、中衣をはかせる暇がないと見て、とっさに袷の紗の掛布団をすっぽり宝玉に掛けてやりました。そこへ丸薬を手にした宝釵がはいってきて、襲人に向かい、

「晩になったらこのお薬をお酒で練ってこちらに塗って差しあげて



散开，可以就好了。”说毕，递与袭人。又问道：“这会子可好些？”宝玉一面道谢，说好了，又让坐。宝钗见他睁开眼说话，不像先时，心中也宽慰了好些，便点头叹道：“早听人一句话，也不至今日。别说老太太太太心疼，就是我们看着，心里也疼。”刚说了半句，又忙咽住，自悔说的话急速了，不觉红了脸，低下头来。宝玉听得这话如此亲切稠密，大有深意；忽见他又咽住不往下说，红了脸，低下头，只管弄衣带，那一种娇羞怯怯非可形容得出者，不觉心中大畅，将疼痛早丢在九霄云外。心中自思：“我不过捱了几下打，他们一个个就有这些怜惜悲感之态露出，令人可玩可观，可怜可敬。假若我一时竟遭殃横死，他们还不知是何等悲感呢。既是他们这样，我便一时死了，得他们如此，一生事业纵然尽付东流，亦无足叹惜。冥冥之中，若不怡然自得，亦可谓糊涂鬼祟矣。”想着，



くださいな。その鬱結した悪血が原因の熱毒を散らしておしまいになったら、じきによくおなりですわ」

そういつて襲人に手渡します。それからまた、

「いまはだいぶよくおなりですの？」

とたずねました。宝玉は、

「おかげでよほどよくなりました」

と札をいいながら、席を勧めます。

宝釵は彼が目を開いて口を利いたりして、さいぜんまでとは様子もちがっているところから、ほっと安堵の胸をなでおろし、うちうなずいて嘆息しながら、

「それにしても早くひとのことばを聞き入れてくださっていたら、今日みたいなことにはならなかったでしょうよ。お祖母さまやお母さまがお心を痛めていらっしゃるのは無論のこと、わたくしたちでも、見ていて胸がうずく……」

と、言いかけたことばを急に呑みこみ、いうに事を欠いて早まったと悔やまれ、思わず顔を赤く染めてうつむくのでした。

宝玉は彼女のはなしを、なんとねんごろでゆき届いたことをいってくれるものか、深い心持が籠められていて、と聞いていましたところ、不意に宝釵はこんどは口をつぐんだきり先を続けようとせず、顔赤らめて面を伏せ、もじもじと帯をいじくり廻すばかり。そのおずおずと嬌びを含んではにかむさまにはえもいわれぬものがあり、見るなり宝玉は思わず気も晴れ晴れとして、痛みもなにもとたんに九重の雲のかなたへ飛び去る始末。そして胸のうちで思いますには、

〈わたしが何度か打たれたくらいのことで、このひとたちはそれぞれに、こうしてたましげな、つらそうなさまをあからさまに見せてくれた。おかげでこちらは目の保養になったが、思えばあわれでもあり、かたじけないことでもある。これでもしわたしが突然思いがけぬ死を遂げるような目にあおうものなら、このひとたちはどんなに嘆き悲しんでくれることだろう。そうと決まれば、この身はたとえ突然死ぬようなことになるろうとも、このひとたちにこれほどまでに悼んでもらえるのだから、一生の仕事などそっくり水泡に帰したとしてもなんら惜しむことはない。このくらいの道理が誰にも教わることなく自力ですつとわからないようでは、それこそ迂闊千万のとんちき野郎というもの……〉

などと考えているところへ、宝釵が襲人にたずねるのが耳にはいり



只听宝钗问袭人道：“怎么好好的动了气就打起来了？”袭人便把焙茗的话说了出来。宝玉原来还不知道贾环的话，见袭人说出，方才知。因又拉上薛蟠，惟恐宝钗沉心，忙又止住袭人道：“薛大哥哥从来不这样的，你们别混猜度。”宝钗听说，便知宝玉是怕他多心，用话相拦袭人，因心中暗暗想道：

“打的这个形象，疼还顾不过来，还是这样细心，怕得罪了人，可见在我们身上也算是用心了。你既这样用心，何不在外头大事上做工夫，老爷也欢喜了，也不能吃这样亏。但你固然怕我沉心，所以拦袭人的话，难道我就不知我的哥哥素日恣心纵欲，毫无防范的那种心性。当日为一个秦钟，还闹的天翻地覆，自然如今比先更利害了。”想毕，因笑道：“你们也不必怨这个，怨那个。据我想，到底宝兄弟素日不正，肯和那些人来往，老爷才生气。就是我哥哥说话不防头，一时说出宝兄弟



ました。

「どうしてまたわけもないのにご立腹になって打ったりなさったのかしら？」

襲人はさっそく焙茗の語ったとおりを打ち明けます。当人の宝玉にしてもまだ賈環のことは知らずにいて、襲人がいったのを聞いて、やっと知ったような次第。ところがつぎに引き合いに出されたのが薛蟠だあって、当てつけたようで宝釵が気分を害しはせぬかと、宝玉はあわてて襲人の口をふさぎにかかり、

「蟠兄さんなら、ついぞこれまでそういうことをなさったためしがない。おまえたち、そんな根も葉もない推量だけでものをいうものではないよ」

とたしなめます。

宝釵はこれを聞き、さては宝玉さん、わたしが気を廻しはせぬかと案じて、襲人の口を封じようとする気らしいと察しをつけ、それにつけても内心ひそかに思うのでした。

〈見るも無残に打たれなさったそのおひとが、わが身の痛みも忘れたみたい、なおもこれほど心を砕いてひとの気を悪くしないように努めなさるとは！してみると、わたしたちのことにもずいぶん気を遣っておいでだということになるけれど、こちらにもこれほど気を遣われるくらいなら、どうして家庭外の大事なことに身をお入れにならぬのか……。そうなされば、お父君だとしてご機嫌がよろしかろうし、自然こんなつまらぬ目を見ることもなかったろうに……。それはこちらとしてはわたしの気を悪くさせまいとして襲人を黙らせようとなさったにちがいないけれど、まさかわたしだとて、現在の兄の、平素勝手気ままに振舞って用心ということのないあの気性を承知していないわけはなし……。以前にも秦鐘とやらいう人のために、やはり天地もくつがえらんばかりの大騒動を引き起こしたことだった。無論こんどはあんなまやさしいことではないに決まっている……〉

そう考えましたので、笑いながらいいました。

「あなたがたもいまさら誰を恨みかれを恨みすることはありませんでしょ。わたくし思いますに、つまりは宝玉さん日頃のお心掛けがよろしくなかったせいですわ。あんな人たちと好んで交際あつていらっしゃるのでは、お父さまだってお腹立ちになろう道理。よしんばうちの兄がいうに事欠いて、うかと宝玉さんのことを口走ったのだといたしまして



来，也不是有心调唆：一则也是本来的实话；二则他原不理论这些防嫌小事。袭姑娘从小儿只见宝兄弟这么样细心的人，你何曾见过天不怕，地不怕，心里有什么口里就说什么的人。”袭人说出薛蟠来，见宝玉拦他的话，早已明白自己说造次了，恐宝钗没意思；听宝钗如此说，更觉羞愧无言。宝玉又听宝钗这番话，一半是堂皇正大，一半是去自己疑心，更觉比先畅快了。方欲说话时，只见宝钗起身说道：“明儿再来看你。你好生养着罢。方才我拿了药来交给袭人，晚上敷上，管就好了。”说着，便走出门去。袭人赶着送出院外，说：“姑娘倒费心了。改日宝二爷好了，亲自来谢。”宝钗回头笑道：“有什么谢处。你只劝他好生静养，别胡思乱想的就好了。不必惊动老太太太太众人。倘或吹到老爷耳朵里，虽然彼时不怎么样，将来对景终是要吃亏的。”说着，一面去了。袭人抽身回来，心内着实感激宝钗。进来见宝玉沉思默默，似睡非睡的模



も、その気でそそのかしたとは考えられませんわ。もとはといえば本当のはなしなのですし、それに兄はこうした人の嫌疑を避けねばならぬこまかいことにまでは気をくばらない性質なのですものね。襲人さんなどは、ちいさいころから宝玉さんのような、こんな細心なおひとしか知らずに過ごしてこられたから、とてもあんな、世の中にこわいものなし、頭に浮かんだことなら見さかいなしにぺらぺらしゃべる人間など、ご覧になったこともないでしょうけれど……」

襲人は薛蟠の件を口に出して宝玉にさえぎり止められたところから、これはわたしとしたことが、うっかり口をすべらせたところと心に心づき、宝釵が気を悪くしたのではないかと案じていました。そこへ宝釵がこういつてくれたものですから、なおさら穴があつたらはいりたい思いで黙りこんでしまいました。片や宝玉は、宝釵のいまのことばを聞いて、堂々と筋の通った意見であることが半分、また自分の懸念を晴らしてくれる内容のものであったことが半分手伝って、さいぜん以上にさっぱりとした心持になりました。そこで口を切ろうとしますと、宝釵はつと立ちあがって、

「明日またお見舞いに伺いますわ。どうぞご養生専一に。さっきお薬を持参して襲人さんにお渡ししておきました。夕方おつけになってみてくださいいな。きっとじきによくおなりですから」

そういうなり戸口を出てゆきました。襲人はあと追って院の外まで送って出ると、

「お嬢さまには、親身にご心配くださいまして……。いずれ若様がよくなれましたら、じきじきお礼にあがられましようけれど」

といいます。宝釵は振り向いて笑いながら、

「別にお礼をおっしゃられるほどのことではありませんわ。あちらにはくれぐれもご養生専一に、馬鹿げたことでくよくよ頭を使ったりなさらぬよう、お勧めしてちょうだい。そしたらじきによくおなりでしょうよ。お祖母さまだのお母さまだの、みなさまをあまりお騒がせしないことね。もしかしてお父さまのお耳にでもはいろいろものなら、そのときはなんでもなく過ぎても、先へいって思い当たったりなさると、結局つまらぬ目を見るのは宝玉さんなのですものね」

そう言い聞かせてから立ち去りました。

襲人はそこで引き返すのですが、心のうちでは宝釵に対して感激していました。部屋にはいってきますと、見れば宝玉は黙然としてなに



样，因而退出房外，自去栉沐。

宝玉默默的躺在床上，无奈臀上作痛，如针挑刀挖一般，更又热如火炙，略展转时，禁不住暖哟之声。那时天色将晚，因见袭人去了，却有三两个丫鬟伺候，此时并无呼唤之事，因说道：“你们且去梳洗，等我叫时再来。”众人听了，也都退出。这里宝玉昏昏默默，只见蒋玉菡走了进来，诉说忠顺府拿他之事；一时，又见金钏儿进来，哭说为他投井之情。宝玉半梦半醒，都不在意。忽又觉有人推他，恍恍惚惚，听得有人悲泣之声。宝玉从梦中惊醒，睁眼一看，不是别人，却是林黛玉。宝玉犹恐是梦，忙又将身子欠起来，向脸上细细一认，只见他两个眼睛肿的桃儿一般，满面泪光，不是黛玉，却是那个。宝玉还欲看时，怎奈下半截疼痛难禁，支持不住，便暖哟一声，仍就倒下，叹了一口气，说道：“你又做什么跑来！虽说太阳落下去，那地上馀热未散，走两趟，又要受了暑。我虽然捱了打，并不觉疼痛。我这个样儿，只装出来哄他们，好在外头布散与老爷听，其实是假的。你不可认真。”此时林黛玉虽



やら考えているふう、眠っているような、いないような態ですので、それではと部屋からさがってきて、髪を梳きにかかりました。

宝玉は黙りこくって寝台に横たわったままでいましたが、なにせ尻のあたりがきりきりと、針で刺されるか刀でえぐられるかのように痛みます。おまけに身体がほてって火であぶられるような熱さ。ちょっと身体の向きを変えようとしたひょうしに、たまりかね、「いてっ！」と声をあげてしまいました。おりから日暮れどきのこととて、襲人は部屋をあけていましたが、あとに二、三人の侍女がつめていました。いまは別段言いつける用事とてないの、

「おまえたち、身仕舞をしにいつてくるさ。呼んだらきてもらおう」

一同もそういわれて、みなさがってしまいました。

こちらは宝玉、暗いなか黙然としているうち、そこへ蔣玉菡がはいってきて、忠順親王のお屋敷から自分をつかまえにきたよし訴えます。やがてこんどは金釧児がはいってきて、彼のために井戸に身投げしたいきさつを涙ながらに語ります。宝玉は夢うつつのこととて、みな気にもとめずにいますと、急にまた誰やらが自分をゆさぶっているような気がして、かすかに人のむせび泣く声が耳にはいりました。宝玉ははっと夢から覚め、目を見張ったところ、それこそはほかならぬ林黛玉その人なのでした。宝玉はそれでもなお夢の続きではないかと、あわてて身をかがめ、相手の顔をしげしげと見やれば、その両の目は桃のように腫れあがり、顔じゅう涙に濡れてこそおれ、これが黛玉でなくてなんとしましょう。宝玉がなおも見定めようとしたとき、下半身がずきずき痛んでがまんがならず、いまは身をささえていることもかなわずに、「いたっ」と一声さけぶなり、そのまま倒れてしまい、ため息まじりにこういうのでした。

「あなたはまた、なにしにのこのこ出ていらしたのです！陽が沈んだとはいっても、まだ大地の余熱は発散し切っていないのに、いったりきたりなさったら、またぞろ暑気に当たりなさるのが落ちですよ。わたしは打たれはしましたけれど、すこしも痛みなど感じなかった。わたしのこの恰好だったら、ただそのふりをしてみな目をくらまし、そとで噂をするのが父上のお耳にもはいるよう仕向けんがための策なので、実をいえばこしらえごと。それを真に受けたりしたら駄目ですよ」

このとき、黛玉は声張りあげて泣くというではありませんでした



不是嚎啕大哭，然越是这等无声之泣，气噎喉堵，更觉利害。听了宝玉这番话，心中虽有万句言词，只是不能说得半句，半日方抽抽噎噎的说道：“你从此可都改了罢。”宝玉听说，便长叹一声道：“你放心。别说这样话。我便为这些人死了，也是情愿的。”一句话未了，只见院外人说：“二奶奶来了。”林黛玉便知是凤姐来了，连忙立起身，说道：“我从后院子里去罢，回来再来。”宝玉一把拉住道：“这又奇了。好好的怎么怕起他来？”林黛玉急的跺脚，悄悄的说道：“你瞧瞧我的眼睛，又该他取笑开心呢。”宝玉听说，赶忙的放了手。黛玉三步两步，转过床后，出后院而去。凤姐从前头已进来了，问宝玉：“可好些了？想什么吃？叫人往我那里取去。”接着，薛姨妈又来了。一时，贾母又打发了人来。

至掌灯时分，宝玉只喝了两口汤，便昏昏沉沉的睡去。接着周瑞媳妇、吴新登媳妇、郑好时媳妇，这几个有年纪常往来的，听见宝玉捱了打，也都进来。袭人忙迎出来，悄悄的笑道：“婶婶们来迟了一步，二爷才睡着了。”说着，一面带



が、しかしこうして声を殺したままでは、泣くほどになおさら息も咽喉もつまってきて、余計つらく感ぜられるありさま。宝玉のいまのことばを聞いて、胸中にはいいたいことが山とありながら、それがひとこともことばにならないのです。だいぶして、やっとすすりあげながら、

「あなた、これを境にそっくり心をお入れかえになってね」

というのが精いっぱいでした。これを聞いた宝玉は、長いため息をもらし、

「安心してください。もうそういうはなしは抜きにしましょう。わたしはあの人たちのためだとあらば、たとえ死んでも本望……」

と、このことばも終わらぬうち、院の外で取り次ぎの声がして、

「璉さまの若奥様がお越しでございます」

と伝えました。黛玉は熙鳳がきたことを知ると、そわそわして立ちあがり、

「わたくし、裏庭から消えます。のちほどまた伺いますから」

宝玉はそういう黛玉をぎゅっと引き留めて、

「これはまた異なことを。わけもなしにどうしてあの人をこわがらだしたのです？」

黛玉は気を揉んで足ずりし、声を落としていうのでした。

「ごらんになって、この目を。またあちらの笑い物、慰み物にされるのが落ちですわ」

宝玉はそれと聞いて、あわてて手を放します。黛玉は三步を二歩の急ぎ足で寝台の背後に廻り、裏庭に抜けて立ち去ってしまいました。と、早くも熙鳳が表からはいつてきて、宝玉にこうたずねました。

「少しはよくなって？ なにか食べたいものは？ あれば誰かをわたしのところへ取りによこしなさいよ」

続いてこんどは薛未亡人が顔を見せ、しばらくして後室が重ねて使いの者をよこしました。

灯とぼしごろともなると、宝玉は湯にちょっと口をつけただけで、すやすやと寝入ってしまいました。そのあとへ周瑞の妻女、呉竜登の妻女、鄭好時の妻女といった、普段出入りの年かきの連中も、宝玉の打擲されたことを聞きこんで、揃って顔を出しました。襲人はあわてて迎えに出て、小声でにこやかに、

「おばさんがた、一足ちがいでしたわ。若様はいま寝つかれて……」



他们到那边房里坐了，倒茶与他们吃。那几个媳妇子都悄悄的坐了一回，向袭人说：“等二爷醒了，你替我们说罢。”袭人答应了，送他们出去。刚要回来，只见王夫人使个婆子来，口称：“太太叫一个跟二爷的人呢。”袭人见说，想了一想，便回身悄悄的告诉晴雯、麝月、檀云、秋纹等说：“太太叫人。你们好生在房里，我去了就来。”说毕，同那婆子一径出了园子，来至上房。王夫人正坐在凉榻上，摇着芭蕉扇子，见他来了，说道：“你不管叫个谁来也罢了。你又丢了他来了，谁伏侍他呢？”袭人见说，忙陪笑回道：“二爷才睡安稳了。那四五个丫头如今也好了，会伏侍二爷了。太太请放心。恐怕太太有什么话吩咐，打发他们来，一时听不明白，倒耽误了。”王夫人道：“也没甚话，白问问他这会子疼的怎么样。”袭人道：“宝姑娘送去的药，我给二爷敷上了，比先好些了。先疼的躺不稳，这会子都睡沉了，可见好些了。”王夫人又问：“吃了什么没有？”袭人道：“老太太给



そういうと、この連中を向こうの部屋へ案内してかけさせ、茶を注いで出します。その妻女たちはいずれもひっそりとしばらくかけていましたが、襲人に向かって、

「若様がお目ざめになったら、よろしくお伝えくださいな」

襲人は「はい」とうけあって、この連中を送り出します。さてもどりかけたところへ、奥方の王氏が老女を使いによこして、

「どなたかおひとり、若様のお部屋のかたをお召しでいらっしゃいます」

と口上を伝えさせました。襲人はそういわれて、ちょっと思案したすえ、引き返して晴雯・麝月・檀雲・秋紋らに小声で、

「奥方さまからお召しですの。あなたたち、粗相のないようお部屋につめていらしてね。わたし、いってすぐもどりますけれど」

そう言い置くと、その老女と連れ立って園をあとに、まっすぐ正房へとやってきました。

奥方の王氏はちょうど涼み用の長寝台にかけ、芭蕉の団扇で風を入れていましたが、襲人の姿を見ると、

「おや、誰をよこしても構わなかったのよ。あんたはまたあの子を放りっぱなしでできてしまって、誰があれの面倒を見ているの？」

そういわれて襲人は、あわててお世辞笑いを浮かべながら、

「若様はいましがた寝つかれたばかりでございます。あの四、五人の娘たちも、近頃ではよほどましになりまして、若様のお世話もゆき届くようになりました。奥方さまにはどうぞご安心のほどを。実は奥方さまからなんぞお申しつけの儀でもおありかと存じ、あの人たちをあがらせて、うかがったことが急に吞みこめずに、ご用が足りなかったりしてもと案じられましたもので……」

「これといって用もありません。ただあの子の痛みようがいまどんなあんばいなのか、それをちょっと聞いてみたかったまでなの」

「宝釵お嬢さまがお届けくださったお薬を塗ってさしあげましたところ、まえよりいくぶんよくおなりでございます。まえは痛みがはげしくて、おちおち寝てもいられぬというご様子でしたが、いまは前後不覚に寝ていらっしゃいますから、あの分ではいくらかおよろしいかと存じます」

と、襲人。奥方はまたたずねて、

「で、なにかいただいたの？」